

Bimonthly for Guitar

Armonia

Vol. IV No. 3

May.-June 1957

第四卷第三号 (通刊21号)

アルモニア

昭和三十三年五・六月



Editor : Dr. Isao Takahashi (Sakamoto, Miyagiken, Japan)

Associate editors: Seiichi Konishi, Jiro Nakano

大阪の日本ギター音楽コンクールが盛会裡に終了し、斯界に若い優秀な新人を迎えることが出来たのを同慶至極に思う。引つゞいて七月末に東京で全国ギターコンクールが開催され、ソ新人の躍進が期待される。やがて九州地区でもコンクールが行われるであろう。夫々の登龍門を経た新人が、更に一堂に会して腕をふるう機会があつて、所謂日本一の公認が行われるようなら結構だがまだそこまで一般の状況は向いていないらしいのが惜しい。

小原安正氏らの奔走によって七月末モスクワで行われる全世界音楽コンクールのギター部門の三木理雄、鈴木巖の両氏を派遣することになったのは、両氏は勿論わが国斯界にとっても幸なことである。シベリアの Fobroff 以外、ソ連のギター界について何ら知識のない私自身にとっても、両氏によって、その様子が報らされることは大きなよこびである。鈴木巖氏は作曲部門にも応募するそうで、栄冠を得られることを切望し、期待する。

夏場所大相撲は戦後派の勝利で幕となった。ギター界は勝負の世界とはわけがちがうが、新鮮な若いシエネレーションの躍進に私は心からの喝采を送る。

(I . T 生)

目 次

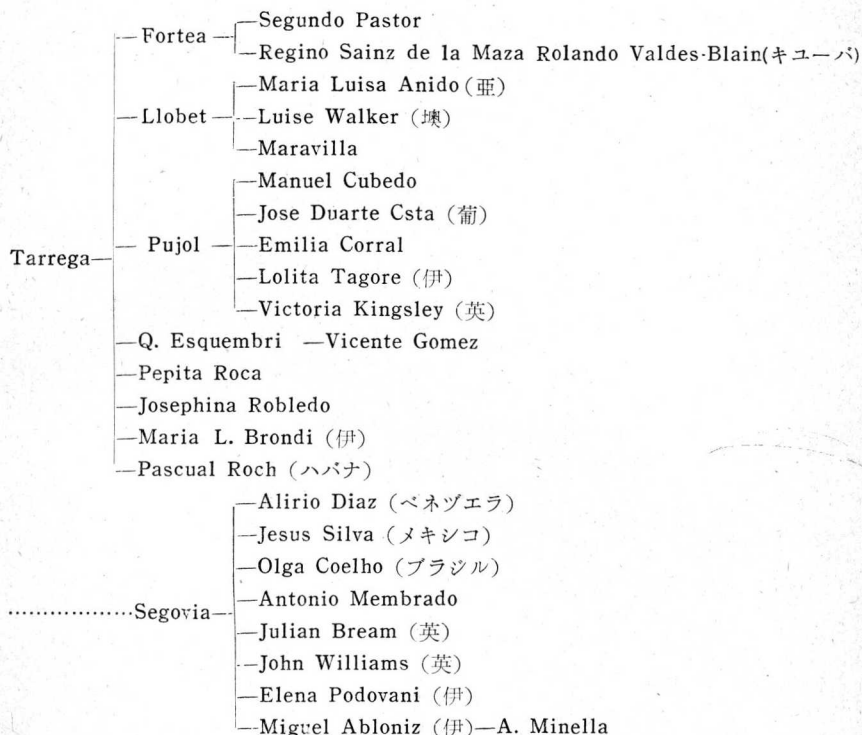
(第4巻第3号通刊21号)

師 弟 論.....	高 橋 功.....	(1)
随 想.....	中 野 二 郎.....	(4)
ギター製作上の難点.....	河 野 賢.....	(6)
全国ギターコンクール.....		(8)
Lp に録音しているギターリスト達.....	藤 田 不 二.....	(9)
Silvio Ranieri.....	高 橋 功.....	(12)
Chigi 伯爵と Pujol と Cubedo		(14)
Putilin と Junsela		(15)
Alexander Bellow		(16)
モスクワの音楽コンクール.....	小 原 安 正.....	(17)
京本輔矩氏のリサイタル評.....	安 達 右	(18)
ギターの LP レコード.....	高 橋 功.....	(19)
右手全指使用の私の考え方.....	鴨 井 幸.....	(20)
テープギターによる重奏.....	斎 藤 勇.....	(21)
海外ギターニュース.....	高 橋 功.....	(22)
	佐 藤 志 智 子	
国内ニュース.....		(28)
添附楽譜 ピロオ作子守唄		

師 弟 論 Guitarists and their teacher

高 橋 功
Isao Takahashi

ギタリストの原譜を作ってみると、すぐれたギタリストは大抵立派な先生に師事していることがわかる。



勿論一度でも教えをうけたことがあれば、形式上師弟の関係を結んだわけであるけれども、私がここでいう師弟の関係は、そういう外面上のことではなく、その技法をうけつぎ、そのスタイルを受けついで場合をいうのである。といて、間接にその技法を身につけ、精神をうけついでいると見られても、実際その門を叩かないのは師弟とは言いがたい。例へばセゴヴィアとタルレガの場合がそれである。セゴヴィアがタルレガの作品をみ、その作品が演奏されるのを聞いて、是非タルレガの教を乞うべく決意したが、その時タルレガは亡くなっていたという。中には又、イギリスの若いジョン・ウィリアムスのようにブジョールにもセゴヴィアにも師事しているのがあるが、これは先生同志が理解し合っている間柄だから差支えないわけである。勿論二人以上の先生に師事していけないという法はないのだけれども。

出藍のはまれ、という言葉がある。どの先生だつて弟子が速やかに上達するのを望んでいるにちがいないし、自分よりすぐれたギタリストになって欲しいと、念願しているに相異なる。若しも弟子の上達や進歩を心よく思わないような先生があったとしたなら、それは好ま

しくない先生である。自分が一年毎に年をとってゆくのを棚にあげて、弟子達が一年と言わず次々に自分の位置に迫って来ることを考えない先生があるとしたら、これ又暢気な話である。たしかブラットが若いアニドについて「昨日までは私の生徒だったが、今日は同輩でありライバルであり、明日からは私の称讃するギタリストになるだろう」と言ったそうであるが、およそ先生たる者すべて、この言葉を吐いたブラットのようにでありたい。

先生は弟子が同格となりライバルとなることを警戒する要はないし、弟子もそれを躊躇する要はない。が弟子たるもの、一度その手ほどきを受けた以上、たとい先生以上の技法を身につけたといて先生をないがしろにしたり、優越感に溺れるようなことがあってはいけない。タルレガは自分の先生が盲目のフラメンコ弾きだったことを自慢にし、自慢にしないまでも決して卑下しなかったことは学ぶべきである。セゴヴィアもはじめはフラメンコの技法を身につけたのだし、そうした先生を持ったことを恥とはしていない。自分が今日在るのを常に先生のおかげと感謝するのこそ弟子として好ましい次第である。

自分の子をいゝ先生につけたというのは親心である。といて先生まかせでは事が足りない。先ず先生に就かせる前に、その素地を作ってやるのが好ましい。古いところでは天才児と謳われたジュリオ・レゴンディが7才のとき父の手ほどきを受け、ブラッテン夫人は同じく7才の時父に習いはじめたし、マリア・リタ・ブロンディもモッアーニやタルレガに師事する前に父に手ほどきを受けたし、ナポレオン・コストは6才のとき母から手ほどきをうけ、18才でデビュー、鬼オレニアニというライバルがあって、互に仲よくし、技能を磨き上げたと伝えられている。現代の名手に例をとるとマリア・ルイサ・アニドもブラットやリヨベットに就く前は父に習ったのだし、フランスのイダ・プレスティも6才から父に習ったのだし、イギリスのジュリアン・ブリームもジョン・ウィリアムスも共に父から手ほどきを受けたし、一部の批評家から第二のセゴヴィアと呼ばれているブラジル生れのローリンド・アルメイダは母から手ほどきをうけたのであった。このような親の指導と理解が、大成の原因をなしていることが案外多いことを考える必要がある。勿論セゴヴィアのように両親の反対を押し切って大成した例もある。このようなレジスタンス（抵抗）も必要な場合があるし、とくに音楽を遊芸と心得ていた日本の古い家庭ではギターを習うなどいへば、親の反対を受けるのが当たり前である。しかし今ではギターを理解している親達が多くなって来ているし、子供用のギターも製作発売されているのだから、子供のギター入門は昔とくらべたら非常に容易になったわけである。

何才頃から習わせたらいいか、という質問をうけるが、それは早い方がいいと答える外はない。大家の例では6才か7才で始めた人が多いので、就学前後が適當であるということになる。オーストリアのカール・シヤイトは15才、ポルトガルのホセ・デュアルテ・コストは16才、イタリアのロリタ・タゴールは17才でギターを始めている。それよりおそいのはダニエル・フォルテアで、タルレガに就いたのは20才だった。出発がおそくとも、素質や指導や努力の如何で、案外上達が早いものである。最近或少女ギタリストから、進学を前にして一日3時間の練習に堪えられないから一時中止しようかと思っていると相談を持ち込まれた。その時私は、3時間慢然と練習するよりは1時間緊張して要領よく練習する方が賢明だし、一日1時間のギターの練習は、進学にさして障碍にはなるまい、と答えてあげた。要は、量の問題でなく、質の問題だと言いたいのである。

ところで、いゝ先生の居ない田舎でどうしてギターを勉強したらいいか、ということを開合される。これは教本をすゝめる外はない。今では日本語版の教本も沢山出ていて、入手にこと

欠くことはない。中には四週間仕上げなどという一見極めて重宝な教本も出ている。速成ということはおかしいことだけれども、一夜づくりの試験勉強とはわけが違うのである。やはり漸進的に進むのがいい。たゞ技法は、文字に現わすことが困難であることもあり、ペンでは意を得ることが少くない。昔から秘傳口授などという方法もあって、技法の習得は難かしいものなのである。古くはカルリ、カルカッシ、Giuliani、ソル、Aguadoなどの教本や練習曲があり、今日でも広く使用されてい、夫々特色があつてどれも捨て難いが、タルレガによつてギターの技法に多くの飛躍が見られるようになった以上、以上の教本だけでは足りない現状である。ところで、タルレガ自身は教本を遺してくれなかつたのである。従つてタルレガの弟子によつて編まれた教本によつて、所謂タルレガ奏法を拘みとる外はないのである。フォルデアの教本は、練習曲の集成の感があり説明が足りない感がある。そこへゆくとパスクアル・ロッチの教本は説明は相当よくゆきとどいてゐるが、興を添えるという工夫が足りないために、やゝ取つきにくい感がある。今のところ日本版のものでは最上最高と言えよう。ブジョールの教本は一昨年第三巻を出して完了したが、スペイン語とフランス語だけなので、この日本語版が出れば幸だが、それまではやはりロッチを推薦したい。その外アルゼンチン版でシノポリ、アレナス、ガスコンなど好ましいのが沢山出ている。

いゝ先生に恵まれぬ地方では、教本はテキストではなく、先生そのものなのである。日本語によるギター教本の決定版が待たれる所以である。

オーガスチン

巨匠セゴビアが使用し、推奨する世界最高のギターナイロン絃

#1	スペシャルナイロン	¥130.00
#2	〃	150.00
#3	〃	160.00
#4	銀 巻	200.00
#5	〃	220.00
#6	〃	240.00
#4	金 巻	220.00
#5	〃	240.00
#6	〃	260.00
#4	純 銀 巻	450.00
#5	〃	550.00
#6	〃	650.00

オーガスチン絃 } 日本総代理店
ホセ・ラミレスギター }
名古屋市中区園井町三丁目三番地
(三協ビル内)

荒井貿易株式会社

電話本(23)一八五八番
振替口座名古屋10849番

マンダリン合奏楽譜頒布

Le Mediator 版の依託販売致します。各曲10部宛在庫あるだけであるから早目に申込んで下さい。

スコア(マ1,2,ドラ、チェロ、ギター・バス)

1. スロン作アリス姫(ガボット) 外3曲 400円
2. メニケッティ作バラのバレエ, 外3曲 400円
3. ローズ作前奏曲外3曲 400円
4. メニケッティ作別れ(悲歌) 外3曲 400円
5. 〃 ゴンドラの舟人の夢 外3曲 400円
6. 〃 黒い瞳(幻想曲) 外3曲 400円
7. 〃 ニノン(ガボット) 外3曲 400円

パート(マ、1,2,ドラ、チェロ、ギター・バス)

1. メニケッティ作黒い瞳(幻想曲) } 400円
コルビエ作原子行進曲 }
2. メニケッティ作魔女の谷(組曲) 400円
3. メニケッティ編ハイドンの牛のメヌエット } 400円
チャイコフスキの無言歌 }
ストラスブルグ行進曲 }

シャープ作

随 想

Essay

中 野 二 郎

Jiro Nakano (Nagoya)

鑑賞家と実践家

山を愛する人達が凡ゆる困難を克服して真剣に目指す山に立ち向う姿は、恰も我々がモンテ・ギタルラの頂きを極めんと日夜腐心し訓練している様子に似ている。然し又山は必ずしも自身その頂きを極めずとも之を眺めてその美しさに魅せられ又打たれることはある。古来山を讃えた詩歌は限りなく、絵画にもその例は多い。又必ずしも何かの形に表現しなくとも美しいものは万人共に之を美しいと感ずるに違いない。見聞の広さと深さによって人夫々に差はあっても之が音楽に於ける鑑賞家、愛好家に当るのではあるまいか。然し私はどうしても鑑賞家と実践家の間には一線を劃さずにはいられないものをいつも感ずる。鑑賞家は愛好家は山深い谷川の雪溶けの水の冷たさ、路傍に咲く名もない花の可憐さ、突如と湧いた霧の恐ろしさに想いを及ぼしたことはあるであらうか。機械文明の発達した今日では飛行機の力を借りて山を俯瞰することすら可能である。然し我々の目標は山の頂きを論ずることではなく自らの足で踏破しようとする事なのである。須く誇りを以て前進して頂きたい。

ギタリストと生活

ギタリストがギター一本で生計を立てることは今日の日本では可成り困難なことである。まして我々が望む純粋な演奏一本では、例えその奏者が隔段に他を引離していたとしても尚且至難のように思われる。勢教授によって生活を支えなければならなくなるが、門弟を多く擁する人程其の為に時間をとられるので我々としては其の人の演奏に将来を托することが出来にくくなって来る。勿論門弟の数が少いとうことが其儘将来を托するに足ることにはならないが、生活を支える為に多くの時間を費せば一定の職業を持って余暇にギターを学んでいる人と時間的には差はなくなるわけである。多くの人の悩みは此処に在るが、一朝にして成るような投機的なことでないから時間的に余裕を持つ人と否とでは（勿論努力は欠くべからざるもの）三年五年の間にはその成果に大きな開きを持つてくることを戒心しなければならない。私は既に斯うした例をいくつか見ているが将来を嘱望される素質を持った人が人間的な悩みの前に意気地なく屈してゆくのが残念でならない。生活のためのギターに成り終るくらいなれば何を好んでギターを選ばなければならないだろうか。道は長く峻しいのである。辛棒強く凡ゆる人間的な試練に耐えて努力を重ねる人の中のみ私は望みを托することが出来る。

融 和

歴史の年齒猶浅い日本のギター界に一城一廓を構えて唯我独尊を秘かに称えるのはもう今日では滑稽である。斯うした風氣が未だに何となく尾を引いてギター界全般の融和が保たれないのは如何にも大人気ないことに思われる。私は過日大阪に開かれたギターのコンクールに出席して、噂さに想像したものとは丸で反対に中堅新進のギタリストが心から協力されている様子を美しいと思った。改めて噂さによって事を判断するのはいけないと思ったが、よい純粋な動機になる企劃が明朗に運ばれるのは気持のよいものである。万一主催者側に不純な動機がかくされてあるような場合は矛盾が生じたり凡てが明朗に運ばれなくなるので如何

にも協力し難いものとなってくる。ギター音楽が可成りな実質を持ちながら他の音楽部門から何となくはずされているとゆう感じを受けるのも音楽以外の面でのつまらない動きが渦していると思われるふしがないでもない。演奏家、教師、製作家が皆夫々の分に専心しつつ融和を保ってゆくことはそんなに難しいことではないように私は思われる。

演 技

一步外へ出れば演技しなければならぬのは年と共に私には厭わしくなる。而も名実具わった人が尚且つ好演技を演じているのを見ると私はイヤでも敗残者たるを自覚せざるを得ない。中には演技そのものとうう人があってつきあいにくい、私には簡単なエチケツトに類することが既に重荷なのである。之では生きてゆけないので最低の線で自分でも解る拙演をしているわけであるが、斯うなると自然に軽く演技の出来る人が羨しい。テレビのコメディ等見ていると、拵え物のおかしき等少しも応えないが、のり平等が余りの馬鹿馬鹿しいセリブのやりとりにおかしくなって次のセリブが出てこない時が一番面白い。ヒョッコリ真実が顔を出すからである。私は昔、不経済と自分の意志を試すつもりで禁煙を誓ってみたことがある。その時家内が買残りの煙草の数を数えているのを見てたまらなく不快になって怒ったことがある。ごまかすといけなからとゆうのであるが、自分がやろうとすることをごまかして何の意味があろう。自分には思ってもみない事だったからである。もっともその禁煙は二ヶ月くらいであったが。

技 術 面 の こ と

東京の新人演奏会、大阪のコンクールで私は沢山の新進ギタリストの演奏を聴かせて頂いた。以前と違っていることは全体をして演奏技術の進歩していることで、甲乙の差が非常に縮められている。師事する人の少い僻地に在って勉強している人の中には独得な(よい意味でなしに)弾き方をしている人もあったが今ではそういう人も非常に少くなった。多くの人の気づいていない技術面の欠陥に就いて述べてみよう。

賞を受けた人の中にも音を美しく出そうする意欲の欠けた或は軽視した演奏は例えダイナミックであっても私は頂けない。

リズムが技術の都合で崩れるのはいけない。

音の無い部分つまり休止が非常に粗雑に扱われている。斯ういう人が又局部的に誇張した表現をとり勝ちで全体が纏りのないものになり易い。

低音の処理が雑で弾きつ放しとゆうのが多い。余韻の長く残る良い楽器で練習してみると解るが処理しない開放弦の音は非常に耳障りなものである。

楽曲の一部分を間違えて覚え込むことは誰しもあり得るが、耳の方で承知しない筈の間違を平気で冒している人がある。横紙破りとううべきか。

急激に音を止める時、或は拇指のみで和弦を強く弾く時大抵非音楽的なものを感じる。処理方法を楽譜の指示から入らずに判断されたい。

早いパッセージでもその一音一音は粒が揃ってよい音でなければならぬ。斯ういう音はゆっくり一音一音を吟味されて弾いてゆく習慣の上に初めて礎き上げられる。左手指さえ動けばよいとゆうものではない。

屢々ミスが繰返されるとゆうことは練習時の悪習慣が渦している場合が多い。

運指の順序によって楽曲を空んじるのはいけない。どうかすると Rondo 等では堂々廻りしていつ迄経っても終れないようなことになる。ずっと昔若いピアニストでそんなのがあった。

ギター製作上の難点

note on construction of guitar

河 野 賢

Masaru Kono (Tokio)

ギター製作上の難かしさと云っても一般の方には何んな所が何のようにむづかしいのか、具体的にはっきりしない場合が多いと思うので、此れらを私の体験に基いて説明するならば使用者のギターに対する認識も一層深まるのではないかと考えます。あまり細かく説明する事も出来ませんので文章の不備な点は宜しく御解説の程お願い致します。

製作上の難点は構造上と音質上の二つに大別する事が出来ます。

構造上で製作者の最も苦心する事は、何時何処でも恒久的に狂いの生じないギターを作る事です。此の為には日本と云う国は御承知の通りかなり製作者にとって不利な条件にあります。冬と夏では著しい湿度の変化がありますし北の北海道と南の九州でもかなりの湿度の差があり、どの地方のどんな季節でも常に安全を保証できるギターを作る事は、読者の想像以上の苦心が必要であります。

楽器の狂いは御承知の如く木材の湿気に依る伸縮性から来るものですが、こゝで少し木材の性質に就いて説明致したいと思ひます。木材の伸縮は木材の方向によって異なり板目の方向が最大で、柁目の方向が之に次ぎ、繊維細の方向が最も少さい。例えば生木を絶乾状態にすると、ギター表面板に使われるエゾ松では、板目が約7%、柁目が4%、縦の方向は柁目の約1/10収縮を見るのである。

此の伸縮率は各種の木材によって異なり、或る程度乾燥した木材は、新しい程狂いが多く古くなるに従って次第に内部の樹脂も安定し、狂い難くなって来ます。ギター用材が殆んど柁目を使用し且つ古い材料を良しとするのは、音響上の理由が第一でしょうが、同時に前記のような理由もある訳です。

扱て実際の製作の場合使用材料は薄く製材したものを、二年以上屋根裏にて乾燥したものを使用しますが、それでも此の木材の欠点は、正確なギターを作る為の大きな障害となります。木材の縦の方向の伸縮が、柁目の方向の1/10位である事は極めて不都合な場合があります。例へば薄い板の片面に直角な方向に縦の細い棒を接着した場合、其の時の湿度の状態より湿度が多くなると、板の伸張の方が棒よりずっと大なる為、板は棒を内側として外に彎曲します。良く乾燥した時にギターの胴を作ったとします。次に棒を取付ける時合憎湿気の多い場合胴の表面板は、僅かに膨らんでいるわけで此の儘棒を表面板と平行に取付けるならば後日乾燥した場合には、指板は12フレットあたりから19フレットにかけて僅かに下に曲がり、ブリッジも僅かに低くなるので指板と絃の間隔が少なくなります。此の様な場合製作者は現在の湿度を考えて、長年の経験により棒の取付角度を適当に加減せねばなりません。湿度の多い時膨脹着其の他重要な作業をする事は、後で乾燥期に必ず狂いを生ずるので、製作者は読者の想像以上の苦心をするものである。これらの対策として、私の場合夏季に於てもストーブを入れた乾燥室で重要な作業を行い、最近では電気除湿機を装備する事が出来たので、作業中の乾燥は一層万全を期せるようになった。

次にネックの狂いであるが、此れを分析するとかなり複雑な力がかゝっているが、絃の張力に依り狂うものと『柁自体の狂いによるものとある。後者の場合主として二つの原因がある。一つは指板と柁の伸縮率が異なる場合と もう一つは、フレットを指板の溝に固過ぎて入れた場合です。ネック材料が乾燥不十分な場合は、例外を除いて必ず外側に曲ります。これは柁の材料と指板の材料は同じ繊維の方向に接着してあっても、指板の黒檀は固くて縮む

率が極めて小さく、桿の材料の方が一般に軟かくて多く収縮する為である。フレットを固く叩き込んだ場合も、度が過ぎると製作当時は真直なネックも、フレットが常に楔の力となつて、指板上面を縦方向に押し広げようとしているので、次第にネックは曲つて来るものである。ネックが絃の張力に負けて外に曲る場合は、桿及び付根の形態と強度及び使用材料の不適當な時と、フレットがゆるく溝の深さだけネックの強度が弱くなった場合とでこれは製作者の設計の誤りと云えます。フレットを指板に理想の条件で嵌め込む事は、実際には非常に精密な工作が要ります。

フレットの溝は鋸で切るわけですが、フレットの足より極めて僅かに溝の幅が狭い事が必要で、フレットを強く手で押入した時、2/3位迄入り残り3/1を、軽く金鋸で叩き入れる程度が最も良く、此の為フレットを全部入れ終ると指板は彎曲するが、その程度は最高部で7~8耗位が宜しく此の様な状態の指板を桿に接着するならば、適度に絃の張力に抵抗する力を持った理想的なネックとなるのである。此の為には製作者は鋸の目立を極めて慎重にして何度も試し切りをしてから実際の溝を切るのである。

ネックに関連して絃のビリつきがある。これは抑へたポチジョン以外のフレット（主に次のフレット）と振動中の絃が接触する雑音で、原因は、1. ネックの彎曲、2. ブリッジの低過ぎ、3. 各フレットの凸凹、4. 表面板の構造の不適當、である。理想的な指板は、第七ポチジョンあたりから、低ポチジョンに行くに従い僅かに前方に彎曲したの、即ち指板は完全に真直ではなく、指板に沿って絃を当てた場合、第七フレット附近の0.3耗位の間幅が適當と考えている。その理由は絃の振動は円弧に近い運動をしており、しかも低ポチジョンになる程振幅が大になるからで。逆に高ポチジョンになる程、指板上を直線に結んだ線と絃とのなす角度が大きくなり、同時に振巾も小となりビリ難くなるからである。

此の外種々難点はあるが長くなるので略させて頂き、音質上の難点に就いて述べたいと思います。

ギターの良否は最後は音で決定されるもので、製作者はその生涯を音質の為に苦しみ続けるのである。音、即ち振動は、確実な姿をつかむ事が出来ないだけに楽器の研究は、極めて無駄の多い。そして感の要求される仕事である。ギターはそれ全体の殆んどが音に影響しているが、その中、音に変化を与える主要要素は、1. 胴の大きさと形態及び絃長、2. 各構造材質の良否、3. 板の厚さの大小、4. 力木の配置と形態、5. ブリッジの形態と材質、等がある。各製作者によって音質の違うのはその目標とする音質が違ふのと、物理的な物の考え方の相違により、材料や厚さや強度等の決定された結果の違ふ為である。前記の要素を、各々数種類用意して組合せ方式で実験するとしても萬の単位となり、到底生涯には何分の一も実験出来ないものである。各機能を表面板に就いて説明するならば。

絃の振動は先づブリッジに伝わり、これから表面板全体に伝わるわけですが、表面板は極めて複雑な振動をするもので、全体の振動と各小部分に分れた振動と同時にしている場合が多く、大体何サイクルの音はどの辺と、決った振動をしておりませんが、構造の一つの条件が変化すると（材質とか力木の配置等）、各サイクルの振動位置も変化するので、ギターによって各々違った状態で振動しているのであります。例えば何サイクルの音を良くしようと思う事は最もむづかしい事です、たとへそれを良くしても他のどこかに欠点が生ずる場合もあり、非常に忍耐の必要な研究です。よく同じ音のギターは二度と出来ないと言われますが、すべての条件を全く同一にする事が殆んど不可能な為で、若し非常な努力をして同一の条件にしたとしても、現在のものが完全無欠でないならば、製作者はその為の努力はしない

でしょう。又銘器を参考にして作る場合その製作者の目標とした音と、音響上の物理的考え方が確実に理解出来なければならず、単に外面の構造状態を見たのみでは、その意図した各要素の機能を知る事が出来ないので、殆んど失敗に終るのであります。

結局自分のギターの音質の欠点を改良して、理想の音質に到達しようとする道は、極めて困難であるけれども常に休む事なく欠点の改良に努力するならば、ハッキリした真実は掴めなくとも或期間には必ず良くなって行くものです。故製作者は演奏家と同様により高き音楽上の音質と、同時に音響上の物理的考え方の真実を追求し、自分の製作したギターに於て、音楽的に極めて重要な意味を持つ音が、どのポジションに与えられても、その詩情を完全に満足出来るか否かを慎重に検討し、自分のギターの欠点と長所を良く理解してから。今迄の経験を総合して次に作るべきギターの要素を決定するのであります。

第六回全国ギターコンクール

既に五度の全国ギターコンクールを催したことによって有力なる新人を見出し、之が榮ある登龍門となったことは周知の通りです。此度、新たな構想を以て更に權威を加え第六回コンクールを催すことになりました。全国の親愛なるギタリスト諸兄姉の参加を心から期待しています。

◇日 時 昭和32年7月28日(日)午後6時半

◇場 所 千代田公会堂(九段下)冷房完備

◇資 格 一切の制限を設けず

◇種 別 独奏に限る

◇課題曲及び自由撰択曲

A 課題曲 涙(前奏曲)タルレガ作曲

B 自由撰択 曲一曲として時間的制限を設けず

◇審査員(五十音順)

井上 頼 豊 小 原 安 正 小 船 幸次郎 月 村 嘉 幸

中 野 二 郎 山 根 銀 二 マリア・ルイザ・アニド(予定)

◇参 加 料 500円

◇申 込 住所氏名、生年月日、性別、略歴、自由撰択曲及び其の作者を明記し
参加料を添えて左記へ申込む(用紙任意)

東京都中野区駅前一番地 日本ギター連盟 コンクール係

〃 千代田区内幸町 中部日本新聞社 ギターコンクール係

◇締 切 6月末日(当日の消印あれば有効)

◇入 賞 第3位までとし次点者は1名とする(但し該当無き場合は空位もあり得る)

◇賞 品	特 賞	文 部 大 臣 賞 予 定	作 品 献 呈	手 工 ギ タ ー そ の 他
	第1位賞	ス ペ イ ン 大 使 杯	作 品 献 呈	手 工 ギ タ ー そ の 他
	第2位賞	中 部 日 本 新 聞 社 杯	作 品 献 呈	手 工 ギ タ ー そ の 他
	第3位賞	日 本 ギ タ ー 連 盟 杯	作 品 献 呈	手 工 ギ タ ー そ の 他

主 催 日 本 ギ タ ー 連 盟、中 部 日 本 新 聞 社

後 援 ギ タ ル ラ 社、ス ペ イ ン 大 使 館、日 西 文 化 協 会

LPレコードに録音している

ギターリスト達 (その1)

Guitarists and their Lp-records

藤 田 不 二

Fuji Fujita

一九五七年一月現在アメリカ合衆国でLpレコードの入手出来たギターリスト達は、(一)ラウリンドー・アルメイダ Laurindo Almeida (二)マリア・ルイザ・アニド Maria Luisa Anido (三)フェリクス・アルグエレス Felix Arguelles (四)ローランドー・ヴァルデス・ブレイン Rolando Valdes Blarin (五)ジュリアン・ブリーム Julian Bream (六)レイ・デ・ラ・トーレ Rey de la Torre (七)アナトール・マルコフ Anatole Malukoff (八)リチャード・ピック Richard Pick (九)カール・シャイト Karl Scheit (十)アンドレス・セゴヴィア Andres Segovia (十一)ルイゼ・ヴァルカー Luise Walker (十二)ナルシソ・エペス Narciso Yepes (十三)グスタヴォ・ゼポール Gustavo Zepollなどである。シュツンのLPカタログでは、ゼポールの性がレポールと誤植されていた事があった。今月から現在LPレコードに録音しているギターリスト達について述べてみたいと思う。資料不足のものもあるが、他日補足するとして、一と先ずまとめてみた。将来参考の便を考へて演奏家達の名芸のABC順に配列した。

Aguilera, Paco.

アグイレタはスペインの著名なフラメンコ・ギターリストであると云はれている。彼は同国のギター演奏家のファン・マルティネツとスペイン音楽センター(略称SMC)レコードへ、フラメンコ舞曲を録音している(SMC-一五五〇、十吋)。彼等の演奏した曲目は左の七曲で、フラメンコ特有である足ぶみの音が共に吹込まれている。

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1) Fiesta Gitana. | 5) Zapateado. |
| 2) Soleares. | 6) Sulerias. |
| 3) Alegrias. | 7) Sevillanas. |
| 4) Farruca. | |

Almeida, Laurindo.

アルメイダは一九一七年にサン・パウロでに生れた。ブラジルのギター独奏家であって、現在はアメリカ合衆国でジャズ楽団に出演して生活する外、個人教授所を開いている。彼について驚嘆させられる事は、ギターの演奏と音楽は全く独学で、現在の地位についている事である。リオ・デ・ジャネイロのマリンク・ヴェイガ放送局の部員を数年つとめたのを含み十一年間ギターリストとして演奏活動した後渡米し、ハリウッドでBorder Line (国境線)、A Song is Born (一つの歌が生れた)などいくつかの映画のために演奏した。一九四六年からロス・アンゼルス市で個人教授所を開設し翌年にスタン・ケントンの楽団に加はり、それと共に演奏会に出演、一九五〇年春アメリカ合衆国での全国演奏旅行では四月八日と九日ニュー・ヨーク市のカーネギー講堂で演奏会を行った。

リオ・デ・ジャネイロではアルメイダは放送投票で一九四八年と四九年の「ブラジルの最良のギターリスト」となっていた。彼は二ケ年間ブラジル陸軍の兵役に服した。

一九五〇からキャピトル・レコードへ録音を行っていて、今日迄に「ラテン・アメリカの音楽」P-八二三一、「ロマンティックな時代」(同八三四一)、「スペインのギター音楽」

(同八三九五)など発売されている。彼が最初に録音した「ギターのための演奏会創作」と題したアルバムには、「ミスティブアド」、「インソムニア」、「スエニヨ」、「ブラジアンズ」など組合されていた。スタン・ケントン楽団との録音もある。

アルメイダは創作もしていて、「レコ・レコ」(一九四七年)、ピアノ独奏曲「インソムニア」(同年)、「アマゾニア」(同年)等はニュー・ヨーク市のアントバル音楽商社が出版している。一九四四年五月二十日にマリアM・アルメイダと結婚、写真が趣味の一つである。身長五呎九吋を有し、ローマ・カトリックの信者である。彼については本誌の第二巻三号(写真の頁)及び第二巻五号の拙稿を参照されたい。

Almei ra, pepe de.

アルメリアはスペインのフラメンコ・ギターストである。

マノロ・レイヴァは彼のギター伴奏で、「フラメンコの歌」を録音している(ロンドン・レコード国際版 TWV 九一〇五一)。

Anido, Maria Luise.

アルゼンティンの婦人ギターストのアニドについては、本誌第一巻四号及び第二巻三号(アルゼンティンのギター・レコード)を参照されたい。

彼女は来日記念として日本コロムビア(約一時間のプログラムを録音して帰国したのであったが、彼女の録音契約の条項により、日本での発売は不可能になっている。

アニドの独奏したスペイン音楽の「リサイタル」Lpは、キャピトル・レコードから発売されている(P-一八〇一四)。この録音はイギリスの電気音楽工業がキャピトル・レコードを買収した結果もたらされたものである。エンジェル・レコードとして日日本で発売される日もある。

Arguelles, Felix.

アルグエレスはスペインのギター独奏家である。

彼はSMCLPへ「クラシック・ギター・リサイタル」と題し、左の作品を録音している。

- 1) Serenata Espanola (マラツ)
- 2) Vidalita (シノポリ)
- 3) Tientos (フラメンコの主題による自作)
- 4) Estudio Brillante (アラアル・タルレガ)
- 5) Minueto (E・ソル)
- 6) Capricho Arabe (タルレガ)
- 7) Nocturne (オルランディ)

シノポリの「ヴィダリタ」は「エスティに・アルヘンティノ」とも呼ばれ、オルランディの作品はトレモロ形式の練習曲である(SMC-五〇七)。

彼のギター独奏をしたLpはもう一枚ある。これには次の作品を組合せている。

- 1) Alborada & Danza Mora (タルレガ)
- 2) Trianerias & Guajiras (フラメンコの主題による自作)
- 3) Courante (バッハ)
- 4) Estilo popular Argentino (クイジャノ)

Leyenda (Astrias) & Prelude (アルベニス・タルレガ)

「アンボラダ」は(Cajita de Musica)の副題をもっている。(SMC-五〇六)。

Arlovsky, Nicolas.

アルロフスキーはロシア系フランスの演奏家ようである。

ソプラノ歌手のサラ・ゴルビーは彼の伴奏で「ジブシー歌曲」をフランスのデュクレター・トムソン・レコードへ録音した。この録音は一九五三年度のディスク大賞の一つを獲得した。日本ディスクが国産化する日もあろう。

Azpiaz, Jose de

このスペインのギター独奏家については、本誌の第三巻三号（裏表紙の内側の頁）を参照されたい。

アスピアスはフランツ・ヴォルターの指揮している、ゼネヴァ室内合奏団のメンバーである。バリトン歌手のフレデリック・フローは、アスピアスのリュートとギター伴で、ドウランドの歌曲を録音している（ESM 一）。この録音はジュワンのLpカタログにはのっていない。EMSはニュー・ヨークのエレーヌ・ミュージック・ショップの略である。

彼はドウランドの「ラククマエ」の録音にも参加していた。（同一二）。

Badajoz, Justo de.

バダホスはスペインの演奏家ようである。彼の独奏した左の作品はアメリカ合衆国のモンティラ・Lpに組合されている（FMLD 四四）。

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1) Zapatao de Cadiz. | 6) Alegrias de Baile. |
| 2) Granadinas. | 7) Aries de Triana. |
| 3) Alegria por Rosa. | 8) Tarantas. |
| 4) Fandangos de Huelva. | 9) Aires de Jerez. |
| 5) Recuerdo a Cordoba. | |

彼はコンチタ・マアティンの独唱したスペイン民謡の録音に伴奏した（同 Lp）。

Blain, Rolando Valdes.

このキューバのギターリストについては、本誌の第三巻四号（百四頁）を参照されたい。彼の最初のギター独奏Lpは、いんの名作「大奏編曲」（作品二二）であった。この作品はアレグロ・ブイランテ、アダージョ・マエストーツ、ミヌエツトとロンド・ヴィヴオからなっている。ソルはギターをイギリスへ紹介、同国で普及させた作曲家であった（SMC 五四六、十時）。

Bream, Julian.

ブリームはイギリスのギタリストのように思はれる。少く共現在同国に住んでいて、演奏活動をしているので、詳細を入手に努力中である。

彼の独奏した録音はアメリカ合衆国のウェストミンスター・レコードから発売されている。一九五六年七月新譜であったSWN 一八一三五は、チューリナの「ギターのための五曲」、ファリアの「クロード・ドビュッシーの暮」、ソルの「ギターのための七曲」を組合せていた。

次いで発売されたSWN 一八一三七は、ヴィラ・ロボスの「五つの演奏曲」、モレノ・トルロバの「ギター曲」を録音したものであった。

De la Torre, Jose Rey.

このキューバのギター独奏家については、本誌の第二巻三号（写真の頁）を参照されたい。

添附楽譜 アレキサンダー・ピロオ作 子守唄

私の手元にあるピロオの作品は次の三曲である。(1) 第一夜想曲 (2) 悲歌 (3) 古典曲シリーズ（ヘンデル編）。何れも小品でカナダのモントリオールの音楽出版社から出版されたものである。子守唄は一昨年筆者のために作曲されたもので、臨時記号が多いので目ざわりな感があるが、なかなか雅緻のある小品である。

昨年11月20日ベルギーのブラッセルで亡くなったシルヴィオ・ラニエリに対して、かつてのライバル **Giuseppe Pettine** は「凡てのマンドリン愛好家は、今までに一番すぐれたマンドリンの演奏家で、教授で且つ作曲家の一人であったラニエリの逝去を知って、深い悲しみにとぎれていっていると思う。全世界のマンドリニスト、フレット楽器の愛好家達は、稀にみる芸術家の死を嘆き、この先これほどの人物がいつ現われるか知れないのを思って、耐えがたい寂寥を感じる」と哀悼の辞を述べている。

ラニエリは1882年11月6日イタリアのローマに生れた。若い頃からマンドリンを手にし、16才の時には演奏会のステージに立った。1901年ベルギーのブラッセルに移住し、爾来マンドリンの演奏家、教授として名を成した。イギリスはじめヨーロッパ各地を演奏旅行して喝采を博し、帰国後ブラッセル音楽学校所属のマンドリンオーケストラの指揮者に専任された。1913年4月パリのリサイタルで一段と名声を高め、1921年フローレンスで行われた作曲家マスカーニを委員長とする国際マンドリンコンクールに際して、その審査員にあげられた。1926年ブラッセルの音楽学校主催で、ラニエリの楽壇生活25周年を記念する特別演奏会があったその時にはギタリスト、エミリオ・ブジョールが助演して、この会を一段と立派なものにすることが出来た。

国王アルベルレ陛下はラニエリの功績をことのほか嘉し、王冠附十字章を授与されたし、音楽学校は記念に胸像を贈った。又この年パリの国立音楽学校の演奏会に招かれて妙技をふるい好評を博した。彼のレパートリにはオリヂナルな曲が少く、ブルツフ、ビュータン、モーツアルト、サラサーテなどのヴァイオリン協奏曲などが含まれていた。

1926年パリのデルグラープ書店から刊行された音楽百科事典のマンドリンの部を担当して、ラニエリは造詣のほどを披歴した。彼の作品はブラッセルの **Oertel** と **Cranz** から出版されている。英、仏、独、伊の四ヶ国語によるマンドリン教本は、ムニエルの大教本に匹敵するものとして好評である。そのオリヂナルな作品は数に於て多くはないが、何れも珠玉の名作である。

就中有名な二調長マンドリン協奏曲は、オーケストラとピアノの両様の伴奏を持っているが、**Allegro Maestoso**, **Romanza**, **Allegro giocosa** の三楽章から成り、ムニエル及びベティネの協奏曲と並び称せられるものである。合奏曲では前奏曲、ピアノ伴奏マンドリン独奏曲では「フルソオの思い出」がとくにすぐれている。

現代イタリアのマンドリンの名手と呼ばれている **Nino Catania** はラニエリの薫陶を受けただけに、その演奏会では好んで二長調協奏曲を演奏している。ベルギーでラニエリに師事したマンドリニストの中では **Franz de Groodt** と **Leopold Vandeevelder** の二人がとくに優れている。

ラニエールは二巻から成るギター教本をはじめ、ギターのための編曲を出版している。
(別項参照)



Silvio Ranieri

ラニエーリのギター曲 (Cranz 版)

- 1) 教本第一巻：初級用 (英、仏、独、伊四ヶ国語)
教本第二巻：上級用 (")
- 2) 独奏曲 マラゲーニア
- 3) 編 曲 バツハ作 ブーレ、ガボツト、サラバンダ、メヌエツト
ベートオベン作 ソナタ「月光」第一楽章
カルカツシ作 トレモロ練習曲
ショパン作 前奏曲 (作品28の6と7) 練習曲 (作品10の3)
モーツアルト作 子 守 唄
メンデルスゾーン作 船唄 (作品10の6)
グルツク作 アルミードのパレエ、イフィゲニのガボツト
ベリーニ作 歌劇「ノルマ」のメロディ
ビバルディ作 シ ー グ
ウイニアスキイ作 ボーランドの唄
イラディル作 ラ・パロマ 其の他



Cubedo (左) と Chigi 伯爵 (中央) と Pujol (右)

昨年ジェネーブの国際音楽コンクール Gitar部門の入選者 Manuel Cubedo Alicart は巨匠 Emilio Pujol の愛弟子の一人である。

多くのギタリストが爪を使った奏法によっている今日、タルレガの指頭奏法をそのままうけついで、発音の美しさは無類と云われている。生れもタルレガ誕生の地カステリオン・デ・ラ・プラナの近くであり、はじめダニエル・フォルテアに師事し、後バレンシアの音楽学校に学び、16才でギター教授の資格を得、最優秀の成績で卒業した。1952年即ち15才でポルトガルに演奏旅行をしたとき、リスボンとコインブラの独奏会で、Rodrigo と Manuel Palau のギター協奏曲をプログラムに組んで、そのみごとな演奏に聴集をうならせたと言われている。

後 Pujol に師事し、更に一昨年、昨年と二度 Siena の Accademia Chigiana で Pujol 及び Segovia のレツスンに参加していよいよ腕が冴えて来たようである。

写真は昨年夏 Chigiana の創立二十五周年記念音楽会々場のスナップである。



Arto Juusela (左) と Ivan Putilin (右)

Ivan Putilin から送って来たヘルシンキの日刊紙本年3月18日は写真入りで、プティリンの50回目の誕生を祝福している。そして略歴を添えているが、それによると……

プティリンは1907年にセント・ペテルスブルグに生れ、1918年にフィンランドに移住した。Sibelius Akatemiassa (シベリウス・アカデミー) で音楽を学び、Lauri Nissinen に就いてダブルバスを習い、後ボストン交響団のバス奏者 Ludvig Jaht に師事した。世界大戦中は陸軍に応召して戦場に立ったが、1947年以降フィンランド・ラジオオーケストラの専属バス奏者となった。

彼は早くからフレット楽器を手にし、ロシアの民俗楽器バラライカの名手で、スカンジナビア諸国に演奏旅行をしたことがあった。ギターは更に上手で1927年以降屢々ラジオ放送を行い、1950年に Helsingin Kitaraseura ヘルシンキギター協会を組織し、その指導者として後進の教育にあたった。本年17才の Arto Juusela はプティリンの弟子中最も上手な有望なギタリストで、この師弟の二重奏は近頃フィンランド楽壇の呼びものになっているという。

フィンランドの民謡のギターのための編曲が数曲あり・シベリウスの「蜘蛛の唄」の編曲はイタリアの Berben から出版されている。



Alexander Bellow

Alexander Bellow は 1912 年にロシアの裕福な音楽好きな商人の子に生れた。6 才の時父は彼にピアノを習わせたが、あまり気のりがせず、折角音楽学校に入れてもらったが、ピアノでは大成する見込みがないのを自覚して、和声と作曲に専念し、指揮法を学んだ。15 才の時、夜の散歩の折或家のバルコニーから流れてくる楽の音に引きつけられて二時間も立ちどまって聞き惚れた。その時からピロオはギターの虜となった。

革命の折ドイツに逃れたピロオ一家はゲツチンゲンに居を構え、指揮法の免許証を持っているピロオはこのオーケストラの指揮者となり、且つ音楽学校で四年もギターを教えた。世界大戦になつたピロオは、ドイツから更にアメリカに居を移さねばならなかった。世の荒波にもまれてピロオの人間が出来上った。現在ニュー・ヨークにスタジオを持ち、ギターの教授をしてい、同地クラシツクギター協会の中心的な存在であるが、その弟子達は先生の音楽性をほめながら同時にその人柄のよさをほめている。後進を導く任に在る者は宜しくそうべきである。

1950 年 Segovia を私邸に迎えたピロオは 11 才の娘ナタリエを紹介し、いつ頃からギターを習わせたらいいかと尋ねたら、セゴヴィアは自分は 10 才からギターを弾いている。と答えたという。それから父についてギターを始めれナタリエは今では父に劣らぬ演奏家になっているという。

モスクワの音楽コンクール

小 原 安 正

第六回世界青年学生平和友好祭が、来る七月下旬、モスクワで開かれるが、その中で催される「国際芸術コンクール」の音楽部門中、ギター部門に参加する人を「ギターニュース」を通じて募っていたが、鈴木巖、三木理雄の両君が応募、五月末の国内審査委員会をパスして参加が決定した。ギター部門は左の規定となっている。

年令規定は三十二才までで、ソロと四名以内のアンサムブルが参加出来る。各々、毎回二回演奏し、うち一曲は民族的旋律、又はその編曲であること。ソリストの演奏は毎回十五分、アンサムブルは二十分を越えてはならない。

鈴木、三木両君の演奏曲目は最終的には決定していないが、鈴木君はバツハの他に自作の古典舞曲、三木君はフレスコバルデイの他に清水環（三代改め）氏の作品が用意されている。何れも民族的色彩の濃いもので、特に鈴木君の古典舞曲はアニドの公式レサイタルのプロにあげられているし、又、清水氏の作品と共に、私が滞欧中、各地で絶讃を得ているので、日本人作品を全世界に紹介する意義は誠に大きいであろう。

モスクワの音楽コンクールは、前回、やはり審査員として参加した関鑑子女史の御話によると誠に温情のある審査をされるそうで、勿論、芸術的に高くなくてはならないが、その他に、その人の内蔵している力をも相当に考慮してくれるそうである。

鈴木君は、この他、自作のコンチェルトを自演し、作曲部門にも参加するのだが、これは別として両君に入賞の可能性があるかないかは断言出来ない。参加するからには入賞を望みたいが、今の日本の浅い伝統の中で、世界に伍しての或る成績を期待するのは、むしろ誤まっている。それよりも此のチャンスに、世界の若いギタリストと交わり、広い視野から自分たちを顧み、又、日本の私たちの音楽をきいてもらう。そしてギターを通じて国際人としての広さを身につけて貰う方が、今、私たちの望み得る妥当な希望ではないだろうか。

これから続けられる此の催しにやがて、すばらしい成績をあげて来る日本のギタリストも出ると思うが、鈴木、三木両君は喜んでその捨石になって頂きたいと思う。

尚、此の鈴木、三木両君の他にバイオリンの辻久子氏などを決定した最終の審査委員会は次のような構成であった。

井上頼豊、山根銀二、関鑑子、福沢アクリビイ、小野アンナ、村松道弥、箕作秋吉、林光、小原安正

鈴木君は二十五才、日本ギター作曲連盟委員、東京生れ、ギターコンチェルト、古典舞曲その他民族的色彩の濃い作品が多い。来る二十五日、リサイタルを開く。三木君は二十六才、東京生れ、小原安正門下で小原の助教授をつとめている。

ギ タ ル ラ 社

東京都中野区駅前一番地

解説付き テープ録音によるギター教授

練習曲を大切に勉強し深い音楽性と高い技術を養ない完全に音楽する態度を創り上げましょう

(A) テープ速度 33/4 吋 10分間 (初 級)	¥ 5 0 0
	¥ 2 0
(B) テープ " " (中上級)	¥ 7 5 0
	¥ 2 0
(C) テープ " 30分間 (中上級)	¥ 1.5 0 0
	¥ 3 5

……吹き込みと解説……

小 原 安 正 先 生 外

※ 御希望の練習曲も吹き込みます
※ 二重奏の御注文にも応じて居ります

演奏家を評する場合独演会を聴いてみないといふと何とも云えないと云う事は真理であると思う。独奏会で二十曲位並べてみると否応なしにその人の音楽の解釈と云うものが出て来るし、真に身についた演奏技術を持っているかどうかと云う事もはっきりして来るからである。この意味で筆者はグループの形式でなされる演奏会について評を求められることを好まない。それ丈に独奏会には大いに期待もするし敬意も表すものである。

京本氏は既にグループセゴビアーナの演奏会や地方の演奏会に活躍していた人であるが6月4日日本相互ホールで開かれたリサイタルが第一回のリサイタルとなった訳である。確か一昨年であったと思うけれどもセゴビアーナの演奏会を聴いた時京本氏の演奏が従来より音色が映えて大きな転換を見せていた事は気が付きひそかな期待を寄せていたのであるが、当夜の演奏を聴いてその期待が実った処迄は行かなかったが決して無駄な期待ではなかった事を知って嬉しく思った次第である。

劈頭のパルデラーパノの二つのソネットはどうみても成功したとは云えなかった。初めのイ短調の方は硬い演奏だったけれども無難であったが次のニ長調の方は余り気負い過ぎたのか音色が雑になって了ったのは惜しかった。高音に比較して低音がさえないのは押弦が強すぎるのではないかとも思はれるのであるが、ヴァイスのガボットや魅力的なバツハのシシリアーナの低音が生きていなかったのは曲全体に致命的な影響を与えていたと思う。ガリアルダやアレマンドをあれ丈弾きこなす演奏技術を示している丈に惜しいと思はれたのである。

第二部のソルのエチュード六曲はセゴビアの練習番号で云えばI, VIII, IX, XII, XIV, XVIであったが総じて非常に忠実に弾かれていて好演だったと思う。IX, XII, XVIの様にアレグロ若しくはアレグレットのものは特に好演だったと思う。然し乍ら技巧的に難しいVIIIに多少の音

の破綻が見られ、XIVの様にアンダンテの曲が若干スタカト気味に聴えたのは余り感心出来なかった点である。何故か二、三弦の低いポジションにびちゃつく音が出るのは楽器のせいであろうか。

第三部は現代作家を中心にした四曲であったがボンセのソナタが特に好演であったと思う。京本氏の個性は特にこの様な曲の解釈に打ってつけの様である。処理し難い二楽章や三楽章の熱情的なフィエスタは、当夜の白眉であった。ワルツは多少甘さに欠けた嫌いがあり余り楽しめなかった。トリナーのアンダンテ、ロドリゴの小麦畑にては何れも好演であったがトリナーのメランコリーな気分を擲んだ点ではロドリゴよりも成功していたかも知れない。

京本氏の示した当夜の演奏はその儘現在の本邦ギター界の水準ではないかと思う。全体を聴いてみて受けた感じは音楽が若いと云うことと測り知れない情熱を持っていると云うことである。本邦のギター界も未だ若いし又測り知れない情熱を持っているからである。多少のミスがあっても自己の音楽性を貫き通している場合はそれが聴取者にも音楽として聴えるのである。京本氏の今回独奏会をされて初めていろいろ反省された事も多かったと思う。今後共多くの人が独奏会を持たれて我々に判断の機会を与えて頂き度いと思う。聴く方も若いし又測り知れない情熱を持っている。積りである。

均斉のとれた響きと最高の音質

ギター製作 河 野 賢

東京都豊島区千早町一ノ四

T E L (95) 5 5 7 4

Segoviaの最新盤Decca 9794を逸早く日本盤JDL-9001で出来た日本デツカは、矢継早やにDecca 9832を発売して喜ばせた(JDL-9003)。前者はソルの作品七曲、タルレガの作品を九曲収めた12吋盤で、ソルやタルレガを研究する上に好ましい参考となるばかりでなく、セゴヴィアの至芸を鑑賞するに役立つ名盤である。小倉俊氏の懇切を極めたジャケツト解説は錦上一花を添えている。

後者は第一面にQuintetto Chigianaと共演でデデスコの作品143番の五重奏曲を入れている。これはロスアンジェルス・ミュージック・ギルトの理事アルフレット・レオナルドの求めに応じてセゴヴィアの為に書かれたものであり、1950年2月から3月にかけて作曲され、翌年4月26日に初演された。初演の時は有名なパガニーニ四重奏団が共演した。この盤はたしか一昨年シエナの音楽堂で録音されたものである。デデスコは私に寄せた手紙で、この演奏に満足していないようだが、それにしてもデデスコの作風を知るには好ましいレコードである。原譜と対照しつつ聞くと、ギターの演奏はセゴヴィア以外の誰も、こうは演奏出来るとは思われない立派なものである。現在この曲をレパートリーに持っているのはセゴヴィア以外ではドイツのシークフリード・ペーレンド位であろう。

第二面にハウクHans Haugの新古典派的な二曲、リョベツトとスクリアピンの小品、それにヴィラ・ロボスの練習曲二曲が収められている。中でも、はじめてレコードにきくハウクの作品が楽しい。小倉俊氏の解説が立派である。

ゴメスVicente Gomezが映画「Goya」の音楽を担当したが、それに用いた音楽がDecca 8236で発売された。これも日本盤を是非出して欲しい。

さきにカンテ・フラメンコ選集を出して好評を博したDucretet-Thomson(日本テイチク)が次いでLuiz MaravilliaのギターにPepe Valenciaの唄を加えた「Ritmos y Cantos de Espana スペインの調べ」(DLP-703)を出した。フラメンコ調の曲では、まるで水を得た魚のように生彩を放っているマラビリアが、タルレガの「アルハンブラの思い出」では甚だ聞劣りがする。かつてWestminster盤「アンダルシアの喜びと悲しみ」中の「サンタクルスの夜」にみられたトレモロのデリカシーが、この「アルハンブラの思い出」できかねないのが妙である。第二面の一曲目フアリアのホタには、タルレガのグラン・ホタの一部分が入っており、クラシック畑の人達にはなつかしいものである。適当なジャケツト解説が欲しい。

アニード女史が全国ギター音楽コンクールの審査員に予定され、再度の来朝を噂されている時、ギタラ社がアニード愛好協会の名の下にアニードのLpを特別頒布することになったのは、機を得たものである。これは先年来朝の折、日本コロムビアに録音したのが、アルゼンチン・Odeonとの専属問題で久しく発売の機を得なかったものである。今ではオデオンとの契約が切れて、アメリカではCapitol盤(P-18014)でも出ているので、日本ではエンゼル音盤として発売される可能性がある。今回発売のものにはオデオン盤にはないタルレガのホタ、ソルのミヌエツト、アルゼンチン民謡の去りし日のミロンとヴィダリータが含まれているのがうれしい。

この外小原安正氏吹込のコロムビアSpが一枚発売される。鈴木巖作古典舞曲と清水環作子守唄の二曲で、戦後発売される最初の邦人作邦人演奏のギターレコードとして期待される。

右手全指使用の私の考え方

鴨 井 幸

初めに右手の小指が一本遊んでいるのは真にもったいないことと考えました。

小指はその性質から、その使用に多大の困難を伴うことは、ギターの場合ばかりでなく、ピアノなどでも知られている通りです。然し絶対に使用されいなという人はないでしょう。

タルレガが近代ギターの祖といわれ、ギターに新しい魅力と効果を与えることが出来たのは環指の肯定と、それらの規則を確立し、最後迄全力を傾けて総ての指の完全な練習に努めた結晶だといわれております。

三本の指より四本が、そして四本より五本の方が使い方に色々組合せがあり、その使用に複雑性があり、困難もあることは確かですが、およそ理論的に可能なことは練習次第で実際可能になり得るはずです。そして実際に可能にされたものは又再び次の新しい理論を産む可能性が予想されましよう。私が求めるのはそれであります。まだ知る事の出来ない新しい理論的可能性を発見するために、今考えられる可能性を実際化しようと努めるのです。

それは確かに、今現に目の前にある楽譜は四本指で充分であり、ことさら五本の指を使って煩わしさを増さなくともいいと考える人があるかも知れません。しかしタルレガ或はセゴヴィア等が歩んだ道を私達が同じ足取りで歩いても、それ以上のものを産むことは到底不可能に近いことです。私達は更に進んだ可能性を持って新しい楽曲を創造してゆくことを目指さなければならぬと思います。

四本の指で出来るものを五本の指で演奏する事は一本分だけ休ませることに等しいかも知れません。然し休ませるということは、とりまなおさず一本分だけ余計に働かせることの出来る可能性を産むことだとも考えられます。二本指交互で音階をした時の指の疲れと、三本指でした時では大部ち

がいます。早く出来るばかりが能でないかも知れませんが、早さを要求する指使いの場合はこの方が有利です。又現にある楽譜でも五本の指を使用した方がはるかに容易に演奏出来ることかうかがわれるものもあります。他の指より短い小指はタルレガ式のように第一絃を **a**, 第二絃を **m**, 第三絃を **i** でタッチするような手の形では困難です。それを第一絃を **i**, 第二絃を **m**, 第三絃を **a** という形にすると第四絃は容易に小指でタッチ出来ることでしょう。私がこれを考え付いたのは、それで和絃を弾いた方がタルレガ式よりも丸くやわらかい音が得られ、そして金属的な或は爪音的な音でない音を得られることを知ったためです。そして又、第一絃第二絃は主にメロディの部分で、これらの絃は最も発達しニュアンスに富んだ **i** の指を使った方が **a** の指を使うより、有意義ではないかと考えたからです。即ち私の考え方は、初めは小指を使うためではなく、そのような音の研究から得られた結論であり、仮に小指を使用しなくても、私はこの形で演奏することにしています。

以上は基だ井戸の中の蛙的な考え方ですが、全指使用を思立ってから一年半、その間種々の困難にゆきあたり、幾度か断念しかけたかも知れません。しかしこれまで考えて書いたものを甦らせては一人でこつこつ研究して来ました。ところが此度アルモニオ (第18号) の海外通信で、アルゼンチンに五本指を特殊テクニックとして使用している先生のあることを知って嬉しく思いました。勿論その先生は私などよりもっと合理的な選指法をしていると思い、一日も早くこれを知りたいと思っております。私は何時筆をとれなくなるか知れない重症患者なので、誰かこの方法に理解のある方がおりましたら、私の考え方をこれ以上に生長させていただきたいと思うものです。

(32. 4. 10)

テープコーダーによる重奏

斎 藤 勇

去4月14日川越洋楽愛好会主催のレコードコンサートに特別出演して、ギター二重奏を行いました。第一ギター斎藤勇、第二ギター、テープコーダーによる斎藤勇です。曲目は

ソル作 月光

フォルテア作 ソナタ

キューイ作 オリエンタール

ファリア作 三角帽子

でした。

テープコーダーによる重奏のアイディアは誰でも考えられたことと思いますが、公演に持ち込んだのは私が最初かも知れません。それで私の体験したことを報告したいと思います。

曲の出始めが、第二ギターから出るもの(例えばシューベルトのセレナーデ)は問題がありません。

第一ギター、第二ギターが同時に始まるものは困ります(例えばフォルテアのソナタ)。そこで私は便宜上最初の二小節位を第二ギターに第一ギターの分もやらせまし

た。するとテンボも分りますから、繰二小節から第一ギターが入るようにしました。

第一ギターが最初に出、第二ギターの休止のものも困ります。これは臨時に、第一ギターのパートを予め第二ギターで録音しておくことにしました(例へばファリアの三角帽子)。次にボリュームですが、演奏中電圧等の関係でボリュームが変化することがありますから、別に一人ミキサーを置かねばなりません。又ピッチの点でも微妙な差がありますから、予めテープの回転速度とギターの方のピッチを、よく合せて置く必要があります。

もう一つ面白い実験は、テープコーダー二台を用いた二重、三重録音ですが、これは大へんむづかしいと思います。第二ギターを先に取り、次に第一ギターのパートを取るわけですが、再生装置、マイクロフォン、再生ボリューム、録音ボリューム、距離などの関係で、その結果が大きく変化しますから、担当よい装置と、慎重な工夫を必要とします。

ギタラ社

東京 中野区駅前一番地

1. コロンビア SP { 古典舞曲……………鈴木 巖 作曲
レコード 子守唄……………清水 環 作曲

ギター独奏 小 原 安 正

予約開始中・発売 32. 6. 末日より ￥350. ㊦ 100.

2. ギター専門誌 「ギタラ」 復刊

予約募集中・配本開始7月初旬より

3. 特別吹込 マリヤ・ルイサ・アニード、LP.33,1/3

日本の音楽愛好家のために特別に吹きこんだ名盤

独奏 マリヤ・ルイサ・アニード

予約受付中・発売7月下旬より ￥1,500. ㊦ 100.

アニードレコード愛好協会

海外ギターニュース

(高 橋 功)

アメリカ:—

1月4日ニュー・ヨークのGreenwich House 音楽学校奏楽堂でソプラノ歌手 Joan Stein の弾き歌い(ギター伴奏)のリサイタルが行われた。四つのシェクスピアの歌について、16世紀と18世紀の古歌を二曲つづ、ドイツのリード二曲、四つの吟遊詩人の歌、イタリアの歌曲 Villanella と La Spagnola、最後にアイルランド、スコットランド、アメリカの民謡という多彩なものだった。

1月11日カーネギー・リサイタルホールに於けるの Manuel Goyol の曲目は

ジュリアーニ作 練習曲三つ
ビラ・ロボス作 前奏曲一番
ソル作 メヌエット二つ
ローベルト・ヴィゼー作 三つの小品
カルリ作 序曲(作品六番)
ドルン作 ロンドレット
シャンド作 前奏曲と即興曲
コスト作 練習曲
カーノ作 トレモロ

1月16日タコマ市シアトル交響楽団の定期公演(指揮 Milton Katims)にAndres Segovia が特別出演してデデスコの協奏曲を演奏した。

1月20日カーネギー・リサイタルホールで有名な Juilliard 絃楽四重奏団の今シーズン第五回の定期公演が行われた。第一バイオリン Robert Mann, 第二バイオリン Robert Koff, ピオラ Raphael Hillyer, セロ Claus Adam で、曲目はテレマン作イ長調ソナタ、シューベルト作ト長調四重奏曲、ベートーベン作イ短調四重奏曲(作品132)。

シューベルトの四重奏曲はギターをふくむもので、第四章 Lento e patetico では

第二バイオリン Koff がギターパートをみごとに演じ、その演奏も立派だったが、効果も満点だったと New York Times も Musical America も賞讃している。因みに、Koff は Alexander Bellow にギターを学んでいる。

1月25日ニューヨークの S. C. G. (クラシックギター協会)の会が Cooper Union で行われた。曲目は

1. ハーゼノール作 フルート、ピオラ、ギターのトリオ (Ralph Freundlich, Natalie Guakov, Harold Morris)
2. ジュリアーニ、ソル、ハイドン、ドウランドのギター伴奏の歌曲 (William Hess, Julio Prol)
3. ボンセ作 変奏曲とビラ・ロボス作 練習曲及前奏曲(独奏 Alexander Bellow)
4. フルートと二つのギターによるラモールの作品(R. Freundlich, Ruth Levy, Vladimir Bobri)
5. ギターの弾き歌い (Anita Sheer)
6. ディアベリ作 ギターとピアノのソナタ (M. Gayol と Carl Miller)

1月25日 Andres Segovia はロスアンゼルス の Wilshire Ebell 劇場で昼夜二回リサイタルを開いて大成功をかちえた。

第一のプログラムにはナルバエスとドウランドの新編曲が発表された外、クレスボ、ロオロ、エスブラなどの珍らしい曲が演奏され、第二のプログラムではバッハのシャコンヌ、デデスコのトナディリアなどが喝采を博した。

2月2日ニューヨークのタウンホールで新人の Richard Dyer-Bennet のギターの弾き歌いのリサイタルが開かれた。リチャード・ベネットは今年度新たにアメリカの国立芸術家協会のマネージメントに加入した(セゴヴィアも加入している)テノール歌手で、その美声とテクニックは高く評価され、Ballade (弾き語り)はベネットの独壇場とまで云われている。ルイス・ミラン、ドウランド、カンピオン、モオトンなどの歌がとりわけ好評だった。

2月15日ニューヨークのS.C.GはMannes Collegeの奏楽堂でHector Villa-Lobosの七十才誕生記念の演奏会を催した。最近大活躍のAlexander Bellowの独奏(練習曲一番、八番、前奏曲一番、四番)にはじまり、Anatole Maluokoffがチロその他(Mignone 作 Modinha, Guarnieri 作 Valse Choro, Almeida 作 Serenata da Saudade)を好演し、M. OlavarriaとJ. Richterの二重奏についてNina DovaがBambalele, O Kinimba, Xamegoなど珍らしいブラジルの歌を弾き歌い、それにマラカス、レコレコ、アゴゴ、タンバールなどブラジルの民族楽器を加えた合奏などもあって盛会を極めた。

2月16日タウンホールに於けるSegoviaのリサイタルのプログラムは

第一部 ナルバエス、ドウランド、スカルラッチィ、バッハ

第二部 ジューベルト、メンデルスゾーン、バガニニ、グリーク

第三部 アルベニス、グラナドス、エスプラ、テデスコ、ビラ・ロボス

Musical Americaはスカルラッチィのガボットを絶賞し、未だにセゴヴィアの牙城に迫るギタリストを見出し得ないと述べている。

2月21日ミネアポリスでA. Segoviaのリサイタルが行われたが、1月の第一週に前売券の全部売つくしたというほどの盛況であった。

3月24日再びタウンホールに現われたSegoviaは、そのプログラムにManen, Tansman, Rodrigoの新しいところを加えて聴衆をよろこばせた外、アンコールにムソルグスキーの「展覧会の絵」の中の「ビイドロ」を出して驚ろかした。セゴヴィアが次に新しい曲、編曲を加えて、自ら進境を見せているのは全く敬服の外はない。

フランス：——

2月13日ガボー楽堂でIda PrestiとLagoya夫妻の二重奏演奏会があったが、二千人を容れるこの大音楽堂が満員だったという。夫妻の名演は最近フランス楽壇の呼びものになっているのだそうである。曲目は、バッハ、スカルラッチィ、マレラ、カルリ、グラナドス、アルベニス、デ・ファリアの作品など。

3月1日ユネスコ会館でユネスコ主催のCarmen Gonzalezのリサイタルがあった。曲目はヴィゼー、トルロバ、バッハ、ソル、タルレガ、ブジョール、グラナドス、アルベニスなどの作品。

月日は不明だがEcole normale de Musiqueの楽堂でSebastian Marotoのリサイタルがあったマロートは本年27才、グラナダに生れ、サン・セバスチアンのSanchez Granadaにギターを学んだ。曲目はヴィゼー、ラモー、バッハ、グラナドス、アルベニス、ビラ・ロボスなど

3月4日ジョパン・ブレエル楽堂でアルゼンチンのGraciela Pomponio, Jorge Martinez Zarate夫妻(本誌前号参照)のリサイタルが開催された。曲目はバッハ、ジューベルト、アルベニスなどの外Aguirre, Iglesias Villoud, Galluzzo, Villa-Lobosなど中南米作曲家の作品が加えられて注目をひいた。

パリのギター友の会主催の例会でハンガリアのBarna Kovatsが紹介された。本年37才でラジオ・ブダペストの専属ギタリストで、会長Andre Verdierはすばらしい演奏家と賞讃し、ラジオ・パリのRobert Vidalの時間に共演し、レコードにも吹込むという活躍をした。

イタリア：——

A.C.I.(イタリアギター協会)主催の作曲コンクールが今年も行われる。規約の大意は

(1) 曲種は独奏及びギターと他楽器との合

奏(トリオ、クアルテット、クインテットなど)

オリジナルの曲で未出版未発表のものに限る

- (2) 賞金は 一等 1.5 万リラと賞状
二等 1 万リラと賞状
三等 賞状

(3) 期間 6 月末日

(4) 送先 Casa Editrice Berben, Via
F-Selmi 41, Modena, Italy

ローマの St. Cecilia 音楽学校が Benedetto di Ponio を教授として三年過程のギター科を新設したが、更に Costa Proakis の率いるクラシックギター・センター Centro di Chitarra Classica が上級コースのレッスンを開始して注目された。これより先ミラノでは Miguel Abloniz がミラノ音楽学校のギター科を担当し、最近ではゼノアの Liceo Zanella では Lolita Tagore を迎えてギターのレッスンを開講するという風で、ギター界の動きが一段と活潑になって来た。

ゼエノアのロリタ・タゴールは印度の有名な桂冠詩人ラビンドラナート・タゴールの姪だが、昨年 5 月ザルツブルグのモーツァルト楽堂でイタリアの若い作曲家 Maria Chiesa に贈られた前奏曲を演奏して注目されたが、最近 Mario Barbieri がギターと十三楽器の為の協奏曲をロリタに捧げた。このようにすぐれた演奏に刺激されて、作曲家達がギターの為の作品をどしどし制作する傾向はうれしいことであり、こうした機運を益々醸成したいものである。

Miguel Abloniz から最近刊の Ricordi 版「十の練習曲集」を贈られた。1946 年から 1951 年までの作品で、主に中級向きの練習曲を漸進的に配列し、運指、ポジション、テンポなどゆきとどいた示指のある得がたい曲集である。(詳細は次号に安達右一が紹介する予定。)

オランダ:—

Jacq Witte の送って来た数々のブログ

ラムから目ぼしいものを拾い上げてみると、ロッテルダム芸術鑑賞会主催の 1956—57 年の演奏会中、先ず 10 月 7 日にスペイン民謡の会があった。昨年 Siena で Segovia のレッスンをうけた Pieter van der Staak が出演し、独奏と歌の伴奏を受持って好評を博した。同じメンバーで本年 2 月 10 日メキシコ民謡の会があって、これ亦好評だった。2 月 3 日には Juilian Bream をロンドンから迎えて独奏会が開かれ、非常な盛会だった。

オランダと隣国ベルギーのギタリストの親睦機関 Constantijn Huygens の昨年 10 月 21 日の会ではスペイン生れ、六年前からベルギーに移住している Nicolas Alonso が独奏して絶讃を浴びた。贈られたサイン入りのプログラムによると次の曲目である。

第一部

サンス作 パパース
ヴィゼー作 ニ調の組曲
ワイス作 イ調の組曲
バッハ作 前奏曲、サラバンド、フーガ、ガボット

第二部

ボンセ作 三つのメキシコ民謡
テデスコ作 タランテラ
ロドリゴ作 麓をさして(アロンゾに贈る)
トルロバ作 前奏曲とファンダンゴ
マルツ作 スペインのセレナーデ
グラナドス作 スペイン舞曲
アルベニス作 セヴィリア

本年の Constantijn Huygens の会は 5 月 19 日 Hilversum の Goois 音楽研究会講堂で行われた。この会場は新市公会堂に向き合ったモダンなビルの一 corner だという。ウィーンのワルカー夫人の特別出演が呼びものになっていた。曲目不詳。

オランダのマンドリンギター連盟機関誌 Mandogita の本年 2 月及び 3 月号が入った。相変わらずマンドリン合奏は活潑だが、ギ

タリストは少く、前出の Pieter van del Staak 只一人の感があるのはいさゝか淋しい。

オーストリア：——

ウィーンでは Karl Scheit の活躍が目立っている。昨年12月12日にリサイタルを開いたシャイトは本年1月13日の「室内楽の夕」に出演し、数々の独奏の外、ハイドンの四重奏曲とヴィバルディの協奏曲を演奏して喝采を博した。

Luise Walker 夫人は昨年末から、ストラスブルグ、クラーゲンフルトなどで、デスコやロドリゴの協奏曲などを演奏し、ラジオでも好評を博したが、3月23日にはモーツァルト楽堂に於ける「ウィーンの夫人音楽家達の会」に共演した。尚18日には Regino Sainz de la Maza の独奏会があった。

曲目は

ナルバエス作 フアンタジア
ムダラ作 フアンタジア
サンス作 ババーヌ
バッハ作 前奏曲
ソル作 変奏曲
ニン・クルメル曲 ミランの主題による
変奏曲
アルベニス作 マラゲニア
アセンシオ作 タンゴ
自作 タンゴ、ハバネラ、カンシオン、ソレア

オーストリアの本年度国際音楽祭は来る7月27日から10間 Styria の Leopoldstein で開催されることになった。風光明媚な古城に音楽家（職業）と音楽教授を集めて各部門の指導とすぐれた実演が行われるのだが、今年度はカール・シャイト教授がギターとリュート部門を担当することになった。

フィンランド：——

3月18日50才の誕生日を記念した Ivan Putilin から、「三ヶ月の兄より」と署名に加えて自作の数曲と、Sibelius のギター伴

奏歌曲を送ってきた。誕生の祝辞を差上げたのに対する返礼で、私の誕生日は彼のそれより遅れること三ヶ月の6月8日なのを伝えたからであった。ギターを通じての心温まる交遊の楽しさを味わったことである。

イギリス：——

年と共に、月と共に内容が充実し今では名実共に国際クラシックギターの機関誌となった Guitar News の主筆 Wilfrid M. Appleby が送ってくれた日刊紙 Gloucestershire Echo 2月23日号によると、シェルトナムの婦人会の集りで、アップルビーが「スペインギター」のお話と実演を行って好評を博した。同地ではアップルビーを中心に毎月例会を開いて同志の演奏を批評し合い向上を謀る会を持っているが、独奏、重奏は勿論ブロックフレーテとギター、歌とギターなど広汎圏にわたった演奏が試みられている。実験音楽教室の観を呈しているが、アップルビーが積極的にギター音楽の普及に乗り出しているのはえらい。

Lancashire のバーキンヘッドに住む Maurice Ashurst も最近音楽と絵画の集り（st. Helen 協会）でギターのお話と演奏を行った。その演奏は古典から現代に及び、これ又好評だった。理論と実際——お話と演奏という様式はギター音楽の普及に好ましいものと思う。

Julian Bream の演奏活動は益々盛んで、3月にアポロ協会主催の詩と音楽に二度出演し、英国各地で数度リサイタルを持った後十日間ドイツ各地を演奏旅行し、再び帰国してテレビとラジオに出演した。4月には7日と28日の二回 Royal Festival Hall の桧舞台上にヴァイオリンの Campoli、ソプラノの Jacqueline Delman と共に立って喝采を博した。5月には5日にオックスフォード、12日にケンブリッジ、12日にはロイヤル・フエチバルホール、25日ノールウィッチで演奏した。今や Segovia を継ぐ第一人者と目されるジュリアン・ブリームが独奏ばかりでなく、広い汎圏にわたり

ギター音楽の領域拡大に努力しているのはうれしいことである。ドイツの Siegfried Behrend もその様に多彩なレパートリーを持って、その点でも次代の双壁と言われるわけである。ブリームの二枚目の Lp (Westminster XWN-18137) は各方面で好評で、週刊誌、Saturday Review は音楽評論家として有名な Irving Kolodin がそのテクニックの確実と音楽上の仕上げのみごとさをほめ、「最近頭角をあらわした演奏家達の中で高位を占める者」と特筆してい、Better Listening 誌も「ブリームの演奏は全く音楽的で、テクニックの欠点もなく、ギターの特徴であるあの柔かい音を失うことなく、而もフオルテが充分に出ているのが際立っている」と讃辞を呈している。日本盤の発売が待たれる。

少し旧聞に属するが昨年10月 Wigmore Hall に於けるブリームのリサイタル (John Lambert の新作 Racitative と Arietta が初演された) に対し Times 誌が口を極めて賞讃したし、11月 Royal Festival Hall に於ける演奏会ではヴィラ・ロボスのギター協奏曲をイギリス初演して喝采を博し、Guitar News 誌は又今までにない程の讃辞を呈した。オーケストラは Raymond Leppard 指揮の Philharmonia Orchestra で編成は三十人であった。

スペイン：——

昨年12月22日に Pujol 夫人 Matilde Cuervas を亡くしたスペインのギター界は更に名花の一つを失った。それはタルレガの高弟で、現在バルセローナのタルレガギター会の名誉会員だった Pepita Roca の死である。本誌第2巻第2号所載の写真でみる通りの高令だったので天寿というべきかも知れないが、やはり淋しいことであり、惜しまれる。

Concerto Levantino の作曲者 Manuel Polau Boix (本誌第2巻第5号写真参照) がこのほどパラウ後援会から作品目録を刊行した。当年64才のパラウは1927年と1945年の二度国民音楽賞を受けたし、文化功労

者としてアロンゾナ十賞を受けたスペイン第一線の作曲家である。交響曲、管絃楽曲、詩劇音楽、歌曲、ピアノ曲、宗教音楽、室内楽曲など多種に及び、標題を示す通り浪漫派的な作品が多い。ギター曲は「東方の協奏曲」の外に「イ調ソナタ Sonata en la (Como una Toccata, Intermezzo, In modo popular の三楽章よりなる)」と「主題と変奏曲 Tema con Variaciones (Fantasia, Allegro)」があり、共に Yopez によってスペイン盤コロムビアのレコードに吹込まれている。外に「十五世紀の無名詩人の詩によするギターと歌の曲」がある。

6月19日から30日までグラナダで行われる国際音楽舞踊祭に、今年はソプラノの Victoria de los Angeles とピアノの Jose Iturbi、それに Segovia が独奏者として迎えられている。それがすむと Segovia は伝記映画に出演し、それから Siena のレッスンに向うという多忙さである。

ポーランド：——

鉄のカーテンの向うのギター界の動静もこの頃だんだん知られるようになった。ポーランドのワルソオで一昨年青年音楽祭が開催され、世界各国から集って来た若いギタリスト達の演技に刺戟されて、おそまきながらポーランドにもクラシックギター協会が誕生した。その中心人物は、長年教職にあった Stefan Ziolkowski である。Bruno Henze の教本によってギターを学んだという。ポーランドは「すぐれたギターの音楽ほど美しいものは外に考えられない」と云った楽聖ショパンの国である。東西文化の交流によってポーランドにクラシックギターがみごとを花を聞くことを期待してやまない。そしてショパンの後輩達の作曲活動によってギター音楽が益々豊かになるであろうことを思うと、何か楽しい気がする。

アルゼンチン：—— 佐藤志智子
日本の新緑の候を想います。こちらは秋

も終ると云うのにまだ汗ばむ日もあります。愈々音楽シーズンを迎えた訳ですが、昨年に較べて格段の活況を呈して居ります。今の処外国音楽家の招聘だけでも六十五組の予定になって居ります（此の中テアトロ・コロンが三十六組占めて居ります）昔のブエノスはこんな様子だったらしいのですが、米弗が解放されて復活したのでしよう。切符は十組、或は八組のブロックになって居り皆ブラテアで聴くとなると日本円で五万円位になりましょか、尤も当日売りの分売がありますので私共は安直にききたい分を選べます。

セコピアは六月にコロンでの独奏会の外オペラ座ではキチアーナ五重奏団で、テデスコの曲を弾く事になって居ります。日本に参ったオイストラフや、ウィーン少年合唱団等も入って居り、今から楽しみにして居ります。

去る五月九日ナルシソ・イエペスのギター独奏会（コロン劇場）の曲目は左の通りでした。

第一部

ラモオ作 メヌエット
ガリレイ作 ニ調の組曲
スカラッティ作 二つのソナタ
バッハ作 ガボット
アルベニス作 ソナタ
ソル作 主題と変奏

第二部

トルロバ作 カステリア組曲
ヴィ・ロボス作 前奏曲
ロドリゴ作 小麦畑にて
グラナドス作 ビラネスカ舞曲

ファリア作 フアルッカ
アルベニス作 レエンダ

澄み切ったスンナリした音色です。クラシックギターの持つ伝統の美しさに感激しました。殊にアルベニス、ファリアのものはその解釈が冴え切っていった様です。

私は四階のステージで聴いていました。右手の運指などかすかに撫でる様なものですが充分聴きとれる程でした。此処の音楽フアンの平静なのに驚きます。

さぞかしコロンの大劇場も、うまるかと想像してをりましたが、入りは四分の一度のもので、ブラテアの売約済の席でさへ棄権して居るのでスカスカしていました。しかし、さすがにアンコールの拍手はなり止まず、ターレガの朝の曲、アルアンブラの想曲、アルベニスのマラゲーニヤと三曲にも及びました。

翌朝ののラブレンサ紙なども大変好評でした。

唯、私の先生はクラシックギターの独奏にあんな大劇場を選ぶのは間違っているとの意見でしたがそんな気もします。

日本でも年々ギターの会が盛なことゝ皆様の御奮闘をお祈りしてをります。今年はギター友の会も復活して大変賑やかなスケジュールです。既に三回程のリサイタルが済みましたが大体三十回以上のものが予定されて居ります。

この十八日には私の先生・マジョローペス・トリオの演奏となって居ります。私もアカデミヤのレッスンが益々厳しくなり一日として怠けられず此処体が二つほしい位です。
(5月15日)

Pascual Roch 著

伊東尚生訳・月村嘉孝註

最新ギター奏法 (タルレガ教程)

第一巻 第二巻 定価 各巻 600円 送料 40円

限定出版のため至急御申込み下さい。

申込所・岐阜市梅河町一丁目六 岐阜ギター音楽研究会
(振替名古屋6074)

取次所・宮城県亘理郡山元町坂元 高橋方 アルモニア

国内 ニュース

4・29 慶応、早稲田、同志社、関西学院・

四大学合同演奏会・日本青年館

第一部 各大学単独

- 1. 慶応・指揮 上野隆司
ロッシーニ作 セビラの理髪師
序曲外2作
- 2. 同志社・指揮 山口憲一
武井守成作 朝鮮の印象、外1曲
- 3. 早稲田・指揮 湯谷偉夫
川崎貞利作 西域より、外2曲
- 4. 関西学院・指揮 岡本一郎
小池正夫作 古戦場の秋、外1曲

第二部 独唱・伊藤京子 指揮・服部正

伴奏・慶応・早稲田合同

ヴェルディ作 乾盃の歌、外2曲

第三部 四大学合同 指揮・服部正

ボアルディユ作 バグダットの
太守序曲

ブラッコ作 マンドリニストの
集い

(アンコール) マチョッキ作 ミレナ

5・5 ナワタ・マンドリン・ギター研究 所第21回研究発表会 大阪元王寺 美術館

5・10 オルケストラ シンフォニカ タ ケイ第58回演奏会 東京高円寺会 館

- 1. ラニエーリ作 前奏曲
- 2. ブラッコ作 マンドリンの群
- 3. ファルボ作 間奏曲
マノンテ作 ダンツァオリジナーレ
- 4. アマディ作 海の組曲
- 5. 川崎貞利作 メコン
- 6. 高橋八郎作 雲
- 7. 武井守成作 晩春、ゆれる一輪の花
- 8. 武井守成作 果物の舞曲
外に佐々木まゆ子、政嗣、忠、紅子の
ギター四重奏 三曲。

5・11 全関西マンドリンオーケストラ連 盟結成記念演奏会 大阪朝日会館

- 1. 関西学院、同志社、神戸商科、和歌
山四大学合同 指揮・服部正

マルキーナ作 エスパニア・カーニ
ボアルディユ作 バグダットの太守
序曲

ブラッコ作 マンドリニストの群

2. トミタ、ナワタ、尼崎、合同

指揮・縄田政次

アチローザ作 オラツツオ、クリア
ッチ兄弟

ガルシア作 ムーア人のグラナダ

3. 比留間きぬ子 マンドリン独奏

カラーチェ作 第十前奏曲

パバレロ作 愛の喜び

4. ギター合奏 指揮・縄田政次

チャービ作 ムーア風セレナータ

ボッシュ作 スペイン風行列

5. ミュージカルブレイ「シンデレラ」

服部正作

指揮 服部正

演奏 各楽団選抜メンバー

ソプラノ 畑中みよ子

バリトン 立柳雅義

ナレーター 葛野閑子

合唱 神戸女学院合唱団

関西学院高等学部グリーク
ラブ

5・12 吉本俊勝門下生私演会・京都アポ ロ音楽ハウス 森田鉄夫、崎浜秀英・ 池原進・佐藤重久・宮島隆生、川辺研 司、木村よし子、原悦子、井上とき子 ら。

5・18 伊藤翁介・多津リサイタル 山 葉ホール (作曲、編曲、伴奏凡て伊藤 翁介)

1. 歌 (ピアノ伴奏)

空想 (竹中郁・詩)

海の心 (深尾須磨子・詩)

風 (林芙美子・詩)

2. ギター合奏

バッハ作 トッカータ (ヘ長調)

3. ギターと歌

棄てられて (竹中郁・詩)

海老茶色の路 (サトウ・ハチロー詩)

お釈迦様 (林芙美子・詩)

——伊藤道郎プレゼント——

スペインの修道院の子 (トルロバ作曲)

パバーヌ (ラヴェル作曲)

4. 皆さんと一緒に歌う曲
はまひるがほ (竹中郁・詩)

5. 歌 (ピアノ伴奏)
この世で一番短い歌 (サトウ・ハチロー詩)

大きい雨 (")

小さい雨 (")

6. 歌 (伴奏、アンサンブル・ジャンソニエ)

ボクは海賊 (藤田圭雄・詩)

色のある唄 (サトウ・ハチロー詩)

面影 (林芙美子・詩)

音信 (")

- 5・18 長崎ギター音楽同好会 商工会議
所ホール 平井貞男、山下亨、馬場秀
四郎、大木清毅 出演

- 5・26 京都大学演奏会 京都成安会館
独奏・山内広志 指揮・山田忠男
テデスコ作 ギター協奏曲

- 5・26日 本ギター教授者協会主催日本ギ
ター音楽コンクール 大阪夕陽迎会館
参加人員 24名 課題曲ヴァンホー
ル作メヌエット

第一位 武井達也 テデスコ作 ヴィ
ボ・エネルシコ

第二位 岡本一郎 グラナドス作 ス
페인舞曲第十番

第三位 貞本国則 ソル作 大独奏曲
次点 西牟田博 アルベニス作 レ
イエンダ

" 茂山政次郎 " "

- 5・27 奥田ギター音楽研究所第八回発表
会丸ノ内ホール 百海啓介 小野瀬文
広ら20名

- 5・29 人見ギター音楽研究所員発表会
練馬公民館 和里田和男、南部定治ら
20名

- 6・4 京本輔矩ギター独奏会 東京日本
相互ホール

1.
A) 二つのソネット……バルデラーバ
ノ

B) ガリアルダ……ガリレイ

C) サラバンド……ヴァイス
ガボット…… "

D) アレマンド……パッハ
シチリアーナ…… "
ブーレ…… "

2.
六つのエチュード……ソル (セゴヴィア)

3.
A) 南国のソナチネ……ボーンセ

B) 小さなワルツ…… "

C) アンダンテ……トリナーナ

D) 小麦畑で……ロドリゴ

- 6・6 比留間きぬ子マンドリン独奏会
東京山葉ホール

1 マンドリン・ソロ

重音式無伴奏

1. 第二前奏曲 カラーチェ

2. 愛の唄 ムニエル

3. 東洋の夢 ダエニス

4. 夢 ジューマン

5. 夜の鐘 ババレロ

6. スコットランドの鈴鐘草

ベッティナーネ

2 マンドリン・トリオ

トリオ・オリジナル ムニエル

マンドリン 比留間きぬ子

セロ 青木十良

ピアノ 武沢武

3 マンドリン・ソロ

ピアノ伴奏 武沢武

1. シブシイ狂想曲 マルチェリー

2. ヴェニスの謝肉祭ベレンニイ 共編
(主題と22の変奏) バガニーニ

3. スペイン絃想曲 ムニエル

- 6・8 伊藤日出夫、マリ子夫妻フラメン
コ演奏会 名古屋愛知県商工館ホール

- 6・9 ナワタ・マ・ギ研究所第二回発表会
大阪天王寺美術館 木村史郎、辻本左
門、足立典夫、大藤義一、外山隆、高
田次男、大成彰、小山一彦、平本明郎、
大島正巳、高橋武

- 6・25 鈴木巖里サイタル・東京有楽町保
険協会講堂

- 7・29 産経新聞主催 ギター小原安正・
チェロ吉田貴寿、ピアノ岩崎洋による
音楽会

編集後記

初夏の風薫る葉月、こゝに第3号をおとさげします。毎度遅刊の言いわけを書かねばならないのは心苦しいことですが、そして私事で恐縮ですが五月から六月にかけて学位論文の仕上げと提出に多くの時間をとってしまい、編集をあともわしにせざるを得なかったことを御了承願います。

ごらんの通りの編集で、海外ニュースの受け売りみたいだと評されそうで気がひけます。毎号写真だけはほめていただくけれども、内容をほめていただけるようにならなくては嘘なことは承知しているのです。添附楽譜は演奏価値に乏しいという声も耳に入り、奏法上の指導的な記事に乏しいという声もきこえて来ます。どれもこれも、もっともなことで、私自身を読者の立場に置いて考えて、まことに恥入る次第です。言いのがれめくが、海外に150の読者(?)を持つ本誌が、国際的なギター界の交流をはかるとすれば、やはりこのような様式にならざるを得ない点もあるのです。しかし誌友の声にいくらかづゝでも応えてゆく気持を常に崩していないことだけは、わかっていたべきだと思います。

中野二郎氏にはいつもお忙しいところをお願いし、申しわけないと思っています。題は随想となっていますが、その内容の重要さは、読んでいただければ、はっきりするはずです。レコード界のベテラン藤田不二氏からも玉稿いただき有難いことと思っています。これは後に新演奏家事典としてまとめられるもの、一部分で、三回にわたって掲載されます。斎藤勇氏の体験記、鴨井幸氏の研究は参考になることが多いと思います。

私は少し大袈裟な題ですが、師弟論を書いてみました。そして写真もそれにちなんだものを二枚入れました。実はアニドの来朝が伝えられている時ですので、リョベットとアニドのも加えたかったのですが、ラニエーリに譲ったものです。ペロオのは十人の弟子達に囲まれている写真もあるのですが、ギターを持っているフオームを見ていたゞきたいので、一人で撮ったのを選んだのです。それに一昨年いたゞいていた子守唄を添附しました。

4月28日上京の折は池ヶ谷一郎氏、比留間きぬ子女史外色々の方々にお世話になりました。一々御礼状を申しませんでしたので誌上をかりて御礼申し上げます。6月に入って龍ヶ崎市の荷見姉妹が訪ねて来ました。中旬には中南米音楽研究会仙台支部例会のアトラクションにフラメンコの伊藤日出夫夫妻を迎えることになりました。こんな具合で伊藤翁介氏、京本輔矩氏、比留間きぬ子女史のリサイタルにお招きを受けながら上京出来ず失礼しました。遠隔の地で思うにまかせず残念に思っています。(高橋)

誌費 1冊 100円 半年分3冊 300円 (〒共) 一年分6冊550円 (〒共)

昭和32年6月20日発行

発行者 高橋 功

発行所 宮城県亘理郡山元町坂元
(振替仙台8681)

印刷所 今野印刷所
仙台市土樋258

